ベブリン
と
バブリン

ある風の日に

　ある冬の日のことです。
　その日はとても寒い日で、冷たく晴れた空を風がびょうびょうと音を立てて吹き抜けていました。

　コウタの部屋の窓も、ガタガタと音をたてました。
　まるで誰かが外から窓をゆさぶっているみたいです。

「なんてすごい風なんだろう。窓が割れちゃいそうだよ」
　コウタは恐ろしそうにつぶやきました。
　窓は、ベブベブ、ベブベブと鳴って、まるでコウタを呼んでいるようです。
　コウタは、ちょっとだけ窓を開けてみようと思い立ちました。

窓を開けて、コウタはびっくりしました。

窓の外に、おかしな二人組が浮かんでいるのです。
向こうもびっくりしているようでした。

やがて、丸い顔をしたほうが、部屋の中に入ってきました。
「うわわわわ」
コウタが驚いていると、丸い顔がニコニコしながらいいました。
「こんにちは！　ぼく、バブリンっていうんだ」
「ば、ばぶりん？」
「そう。それから、外にいるのはベブリンっていうんだ」
窓の外に浮かんでいる、三角の顔をしたほうが、ニコッと笑いました。
「ねえねえ、きみ、ぼくたちのすがたが見えるんだね？　すごいや。君の名前はなんていうの？」
「ぼく？　ぼくはコウタっていうんだ。きみたちはなんなの？」
　コウタがこわごわと聞いてみると、バブリンは得意そうに言いました。
「ぼくたち、冬の風の精なんだよ」
「風の精？」

「そう。風の妖精。冬になると、すごーい風が吹くでしょ？
　あれはみんなぼくたち風の精がやってるんだよ」
　バブリンの言葉にうんうんとうなずいていたベブリンも言いました。
「山の木をざあっと倒すように揺らしたり、窓をガタガタ鳴らしたりもするんだ」
「じゃあ、さっきの音はきみたちがやってたの？」
「そうだよ、面白かったよね」
　ベブリンがさも楽しそうに言いました。
「すごく怖かったよ。窓がこわれちゃうかと思ったんだから」
　コウタは文句を言いました。でもベブリンはまるっきり平気な顔で、
「なあんだ、そんなこと。全然平気だよ」
と笑っています。バブリンたちは平気かもしれないけど、ぼくは困るよとコウタは思いました。

とつぜん、バブリンがいいことを思いついた、と叫びました。
「ねえねえ、ぼくたちといっしょに遊ぼうよ」
「いいけど、なにして遊ぶの？」
バブリンたちはゲームを知ってるかなとコウタは思いました。

「外へ行って、風を起こして遊ぼうよ」
「ええっ？　そんなことができるの？」
「できるよ。ぼくらといっしょに空を飛べばいいんだ」
　コウタはびっくりしました。そんなことができるのでしょうか。
「ぼく、空なんか飛べないよ？」
　するとバブリンがにっこり笑いました。
「大丈夫、まかしといて！」
　そういうと、ベブリンとバブリンは、コウタの右と左にわかれて立って、コウタの手をにぎりました。
「いいかい？　この手をしっかりつないでいてよ。じゃあ、いくよ！」

電線ギター

　次の瞬間、コウタは窓の外へ飛び出していました。
「うわあー、うわあー、すごいや！」
　コウタは思わず叫びました。
　バブリンたちが手をつないでくれているので、まるで雲のように空に浮かんでいられるのです。
　コウタはまるで自分も風になったような気がしました。

　しばらく飛んでいると、下の方に電線が見えてきました。
「ねえねえ、バブリン。いつものように電線ギターやってよ」
ベブリンがいいました。
「よおし。まかしといて」
　バブリンはコウタの手を離すと、ひゅーっと電線の近くまで降りていきました。
　そして、両手で電線をびゅんびゅんと弾き始めたのです。
　高い鉄塔の間に張られた太い電線は、バブリンの手の動きに合わせてビュンビュンと震えます。その音は冷たい冬の青空にひびきわたりました。
「電線がビュンビュンいってたのは、この音だったんだね」

コウタはすっかり感心して言いました。
「バブリンはこの電線ギターがすごく上手なんだよ」
ベブリンが得意そうに言いました。

やがて、だんだんバブリンの動きがはげしくなっていきました。
電線が大きくたわみます。
と、突然、ひときわ大きくはずんだ電線が、バブリンを弾き飛ばしてしまいました。

たつまき

　跳ね飛ばされたバブリンは地上に落ちてしまいました。
　ベブリンとコウタも急いで地面に降ります。
「いやあ、失敗失敗。ついやりすぎちゃった」
　バブリンは照れくさそうに笑いました。
「気をつけてくれよ」
　ベブリンは心配そうです。
「だいじょうぶ、だいじょうぶ」
　バブリンが思ったより元気そうなので、コウタはほっとしました。

「よし、今度は地上で遊ぼう。見てて」
　バブリンはひゅっと杖を取り出して、さっと振りました。
　すると、みるみるうちに、小さなたつまきが起きたのです。
　枯葉やゴミをまきこんで、小さなたつまきはくるくる回ります。
　それを見て、コウタは大喜びしました。
「面白いね！　もっとやってよ」
「いいよ」
　そう言うとバブリンは、杖をもう一振りしました。たつまきはぐんぐん大きくなっていきます。

　大きくなって、大きくなって、ついには3人を巻き込んで、ぐうるぐうると渦を巻き始めました。

ごーっ、びゅわーっ、ぐうるぐうる

たつまきはとんでもない大きさになってしまいました。

「きゃー」「うわー」「たすけてー」

みんな、枯葉やゴミといっしょになって、ぐるぐる回りました。
しまいには、あんまり渦が大きすぎて、3人は山より高いところまで飛ばされてしまいました。

　飛ばされたときにバブリンたちと手を離してしまったので、コウタはどんどん下へ落ちていきます。

「たすけてー、バブリーン！　ベブリーン！」

　コウタはもうだめだと思いました。山がぐんぐん近づいてきます。
　絶対絶命の、大ピンチです。

　そう思った瞬間、コウタの体はなにか大きなものにふわっと受け止められました。

　こわごわ目を開けてみると、ものすごく怖い顔をしたおじいさんがコウタを見つめていました。
「うわわわわ」
「だいじょうぶか？」
　その怖い顔のおじいさんは、思ったより優しい声でコウタに聞いてきました。
「あ、はい。だいじょうぶです。おじいさんはだれですか？」
「わしは冬将軍じゃ。このいたずらっ子どもが迷惑をかけたな」
　冬将軍は、もう片方の手で ベブリンとバブリンをつかまえていました。
　ふたりともシュンとしています。
「たつまきをあつかうときは気をつけろといつも言っておるだろうが」
「ごめんなさい」
　ベブリンがシボシボの声であやまりました。
「あんなに大きくなるとは思わなかったんです」
　バブリンもひょろひょろした声で言いました。
「そろそろ遊びは終わりにして、もどってきなさい。まだまだ仕事はたくさんあるんじゃぞ」
「はあい」

　冬将軍は、コウタをそっと地面に下ろすと、また雲に乗ってどこかへ行ってしまいました。

さよなら　またね

「怖い思いをさせてごめんね」
　バブリンがあやまりました。コウタは急いで首を振りました。
「ううん、だいじょうぶ。すごく面白かったよ」
「ぼくたちもすごく楽しかったよ。ぼくたちの姿が見える人間はめったにいないだ。だから、コウタくんがぼくたちに気づいてくれてほんとにうれしかったんだよ」
　ベブリンが言いました。
「また遊べるよね？」
コウタが急いでそういうと、バブリンは、にっこり笑って言いました。
「ぼくたちの姿が見えたら手を振ってよ。そしたらまた遊べるよ」
「そっか、わかったよ。これからは風が吹いたら、ベブリンとバブリンを探すよ」
　コウタは力強く言いました。

「さよなら、コウタくん。楽しかったよ、また遊ぼうね」
　夕焼けの空に、ふたりは飛んでいってしまいました。
「さよならー！　また遊ぼうねー！」

コウタは大きく手を振りました。

夕焼けの空に

寒い冬の日に、電線がビュンビュン鳴っていたら、よおく見てみてください。
もしかしたら、ベブリンとバブリンがそこにいるかもしれません。